

第3章 桜井古墳群及び周辺の概要

第1節 桜井古墳群と鹿乗川流域遺跡群

(1) 鹿乗川流域遺跡群の名称について

鹿乗川流域遺跡群は標高9 m前後の矢作川中流域西岸の沖積低地上に位置し、その支流である鹿乗川と西側の碧海台地と称される洪積台地の境に沿うように南北約4 kmにわたって展開している。かつては、矢作川の氾濫等によって形成された沖積微高地が島畑として残っていた。昭和30年代に行われたほ場整備の際に、これらの島畑から大量の土器が出土し、遺跡の存在が知られるようになった。

その後、断続的に発掘調査が行われてきたが、平成10年度から14年度に実施したほ場整備事業に伴う発掘調査によって、大量の遺構や遺物が確認され、字名ごとに遺跡名を付けていたこれらの遺跡群が、一つのものである可能性が非常に高くなった。そのため、これらの地区に存在する遺跡を「鹿乗川流域遺跡群」として総称し、従来の遺跡名を使用することを控え、地区(字)ごとの様相を明らかにすることで、遺跡の範囲を再構築することとなった。なお、鹿乗川流域遺跡群は学史的にも著名な古井遺跡群^{ふるい}を内包する名称である。

一連の調査によって、この遺跡群は弥生時代から戦国時代にかけて続く西三河を代表する遺跡群であることが明らかとなりつつある。

(2) 桜井古墳群の調査研究史

明治20～21年(1887～1888)頃、安城市域の村々に地誌材料調査の成果が残る(安城市史編さん委員会1973)。その中には、「桜井村村誌」で二子山として記載される二子古墳、「東町村村誌」で獅子塚・八ッ塚・亀塚と記された獅子塚古墳や八ッ塚古墳等がある一方、「姫小川村村誌」で姫小川古墳の記載がなく、当然のことながら村ごとに差がある。

その後、明治末期から大正初期の動きとしては、『碧海郡誌』がある(碧海郡教育会1916)。この中で「塚墓」として、姫塚、獅子塚、八塚(八ッ塚)、山伏塚、看月塚(月見塚)が紹介されており、八ッ塚からは「東町村村誌」と同様に古鏡が出土したことを伝える。

大正末期から昭和初期に桜井古墳群の古墳踏査が行われ、その担い手は大正11年(1923)に設置された愛知県史跡名勝天然記念物調査会、『桜井村史』編さん計画に基づく桜井村役場であった。ただし、1920年代の動きとしては、大正13年12月柴田常恵氏が二子古墳や浅間神社(姫小川)古墳等を訪れたらしいこと(國學院大學日本文化研究所2004)、昭和2年(1927)10月26日に内務省告示第466号をもって小牧市小牧山とともに二子古墳、姫小川古墳が史跡指定を受けたこと等の断片的な情報に限られる。

1930年代では、小栗鉄次郎氏による調査報告がある(小栗1936)。指定史跡を受けた二子古墳、姫小川古墳を報告する中で、二子古墳では比蘇山古墳、姫小川古墳では獅子塚古墳、姫塚古墳がともに紹介されている。

1940年代には、『桜井村史』が刊行され、その古墳所在表には、桜井10基、東町3基、姫小川6基が記載されている(空原1943)。また、現古井町内の動きとしては、昭和23年から翌年にかけて行われた、塚越古墳の墳丘測量及び発掘調査がある(三井1961)。塚越古墳は、桜井

古墳群の中では埋葬施設の発掘調査が行われ、報告書が残る唯一の古墳である。

1950年代になると、前方後方墳の研究も進展したことから（山本 1951、大塚 1956）、全国的に前方後方墳が確認されることとなり、それまで前方後円墳とされていた二子古墳も前方後方墳であることが判明した（大塚 1961）。地元でも久永春男氏の指導を受けた鈴木和雄氏らによって桜井町の古墳の調査が行われ、二子古墳については測量図を作成、報告書も刊行されている（桜井町文化財保護委員会 1959）。この『桜井町の古墳』では桜井町の古墳を北部の桜井古墳群（二子古墳、印内北分1号墳、比蘇山古墳、碧海山古墳、堀内古墳、もも塚古墳）と南部の姫小川古墳群（獅子塚古墳、八ッ塚古墳、姫塚古墳、崖古墳、姫小川古墳、王塚古墳）にわけており、その後の研究の指針となるべき成果といえる。『桜井町の古墳』では出土遺物がなく滅失した塚（月見塚、亀塚）、または小規模な塚（山伏塚、姫古塚）については、古墳ではなく古塚として扱ったようであるが、小規模だが古墳とされた崖古墳、王塚古墳等もあり、踏査時の何らかの所見があったことのみ推察される。

1960年代から1970年代初頭にかけては、『安城市史』刊行の中心的人物である天野暢保氏によって古井町の古墳を含めた安城市域の古墳が評価され始めた（天野 1960・1971、安城市史編さん委員会 1973）。古井町の古墳については、塚越古墳、東川古墳、三ッ塚1～3号古墳の計5基で、『桜井町の古墳』で古墳として報告された12基の他にも加美古墳、印内北分2号古墳（『桜井村誌』記載の無名古墳か）、山伏塚古墳（『桜井村史』記載）と総計20基の古墳が報告された。この時点では古墳の墳丘規模に基づく古墳編年が行われており、その成果については、内藤晃氏（1966）や柴垣勇夫氏（1970）らも援用している。

1980年代から1990年代初頭にかけては、地域における古墳編年の確立、また前方後方墳の探索という二つの流れがあった。前者については、茂木雅博氏（1974）が提起した従来の二子古墳を5世紀末から6世紀とする年代観への疑義について、鈴木敏則氏も「前方後方墳である二子古墳、獅子塚古墳は中期としておいたが、墳形から前期まで遡る可能性がある」（鈴木 1985、p.64）と記している。そして、赤塚次郎氏によって「豊川水系での小規模な前方後方墳の造営は4世紀中頃を境に終焉し、それに変わるかのように矢作川中流域に前方後方墳の集中する地域（安城市桜井古墳群）が出現してくるようである」（赤塚 1990、p.20）、「三河地域最大の大型墳造営地」（赤塚 1990、p.21）と評価されることとなる。後者についても、赤塚次郎氏による一連の研究（赤塚 1988・1992ほか）があり、古墳時代社会における二子古墳の位置づけが重要になるのはこれ以降といえる。なお、昭和63年『愛知県遺跡分布地図』に古井町愛染古墳が初出され、桜井古墳群とされる古墳は総計21基となった。

1990年代前半から2000年代前半にかけては『新編安城市史』刊行に向けた墳丘測量調査等の基礎情報の蓄積にあてられ、その成果としては『新編安城市史』（通史編、資料編考古／安城市史編集委員会 2004・2007）や『愛知県史』（愛知県史編さん委員会 2005）、川崎みどり氏による安城市内の古墳集成がある（川崎 2007）。そして、国指定史跡である二子古墳、姫小川古墳の墳丘範囲確認調査を始め、開発案件に伴う場合が多いものの、桜井古墳群を構成する古墳の調査も断続的に進められている（安城市教育委員会 2007・2011）。

ただし、古墳の墳形や墳丘規模が判明していないものも多いことから、その評価は定まっていない。例えば、①古墳群内の群構成、②構成古墳の築造時期が挙げられる。①は桜井町文化財保護委員会がまとめた2群に古井町域の古墳を含めるか、含めないかによって南北2群とする説と三群にわける説がある（加納 2007、樋上 2011ほか）。また、②は前方後方墳から前方後円墳

へと墳形が転換していくという一般的図式が桜井古墳群に当てはまるかどうかという問題である(瀬川 2012 ほか)。そうした課題を克服するためにも計画的な調査が必要となっている。

参考文献

- 桜井村 1887 『桜井村村誌』、東町村 1888 「東町村村誌」、姫小川村 1888 「姫小川村村誌」(安城市史編さん委員会 1973 『安城市史』資料編、安城市教育委員会に所収)
- 碧海郡教育会 1916 『碧海郡誌』
- 小栗鉄次郎 1936 「碧海郡桜井村大字桜井二子古墳」『愛知県史跡名勝天然記念物調査報告』第 14、愛知県
- 小栗鉄次郎 1936 「碧海郡桜井村大字姫小川姫小川古墳」『愛知県史跡名勝天然記念物調査報告』第 14、愛知県
- 李原利一 1943 『桜井村史』 桜井村役場
- 山本 清 1956 「出雲における方形墳と前方後方墳について」『島根大学論集』1、島根大学
- 大塚初重 1956 「前方後方墳の成立とその性格」『駿台史学』第 6 号、駿台史学会
- 桜井町文化財保護委員会 1959 『資料編 桜井町の古墳』
- 天野暢保 1960 「矢作川流域における古墳時代」『歴史研究』第 7 号、愛知学芸大学歴史学会
- 三井 博 1961 「安城市『塚越古墳』について」『博物館彙報』第 2 輯、安城市立図書館
- 大塚初重 1962 「前方後方墳序説」『明治大学人文科学研究所紀要』第 1 冊、明治大学
- 内藤 晃 1966 「東海」『日本の考古学』IV 古墳時代(上)、河出書房
- 柴垣勇夫 1970 「東海の古墳 - 尾張・三河の実態 -」『古代の日本』6 中部、角川書店
- 天野暢保 1971 「地方国家の成立」『安城市史』安城市史編さん委員会
- 安城市史編さん委員会 1973 「安城市古代・中世遺跡一覧」『安城市史』資料編
- 茂木雅博 1974 『前方後方墳』雄山閣出版
- 鈴木敏則 1985 「三河」『季刊考古学』第 10 号、雄山閣出版
- 賛 元洋 1988 「愛知県三河地方の前方後方墳」『古代』第 86 号、早稲田大学考古学会
- 愛知県教育委員会 1988 『愛知県遺跡分布地図』
- 赤塚次郎 1988 「東海の前方後方墳」『古代』第 86 号、早稲田大学考古学会
- 赤塚次郎 1990 「西部(岐阜・愛知)」『古墳時代の研究』
- 赤塚次郎 1992 「東海系のトレース - 3・4 世紀の伊勢湾沿岸地域 -」『古代文化』第 44 巻第 6 号、古代学協会
- 赤塚次郎 1992 「海部郡と三河湾の考古学」『伊勢と熊野の海』海と列島文化第 8 巻、小学館
- 賛元洋・神谷友和 1992 「三河」『前方後円墳集成』中部編、山川出版社
- 鈴木敏則 1995 「三河」『全国古墳編年集成』雄山閣出版
- 安城市史編集委員会 2004 『新編安城市史』10 資料編考古
- 國學院大學日本文化研究所 2004 『柴田常恵写真資料目録 1』
- 愛知県史編さん委員会 2005 『愛知県史』資料編 3 古墳
- 中井正幸 2005 『東海古墳文化の研究』雄山閣
- 土生田純之 2006 『古墳時代の政治と社会』吉川弘文館
- 赤塚次郎・早川万年 2006 「東海・東山」『古代史の舞台』列島の古代史 1、岩波書店
- 安城市史編集委員会 2007 『新編安城市史』1 通史編原始・古代・中世
- 加納俊介 2007 「前方後円墳の成立と展開」『新編安城市史』1 通史編原始・古代・中世、安城市史編集委員会
- 安城市教育委員会 2007 『史跡二子古墳』安城市埋蔵文化財発掘調査報告書第 19 集
- 川崎みどり 2007 「安城市内の古墳」『史跡二子古墳』安城市埋蔵文化財発掘調査報告書第 19 集、安城市教育

委員会

安城市教育委員会 2011『史跡姫小川古墳』安城市埋蔵文化財発掘調査報告書第27集

樋上 昇 2011「伊勢湾東岸部における古墳時代前期集落群の構造と階層性 - 愛知県一宮市萩原遺跡群と安城市鹿乗川流域遺跡群の分析から -」『古墳時代集落研究の再検討～前期から中期の集落群を考える～』第16回考古学研究会東海例会

瀬川貴文 2012「東海・甲信」『古墳出現と展開の地域相』古墳時代の考古学2、同成社

第2節 本質的価値について

(1) 桜井古墳群について

桜井古墳群は、矢作川流域の古墳時代前期を代表する古墳群である。これまでに、碧海台地の東縁部を中心に、大小20基ほどの古墳が確認されている。

その中でも、国指定の二子古墳は墳丘長68mをはかる愛知県最大の前方後方墳であり、矢作川流域における最古級の古墳と考えられる。同じく国指定の姫小川古墳は墳丘長65m以上の矢作川流域最古級の前方後円墳で、二子古墳とほぼ同時期に築造されたものと想定される。発掘調査では幅10m、深さ2mほどの周溝が確認されている。

両古墳は、古墳時代前期に本区域を活動領域とした有力首長の墳墓であった。また、埴輪と葺石がないことも共通の特徴である。

両古墳以外にも前方後円墳あるいは前方後方墳と想定される古墳が2基ある。塚越古墳は、その墳形と副葬品から、桜井古墳群を前期古墳群と認識するために定点となる古墳である。獅子塚古墳は、桜井古墳群で初めて埴輪が出土した古墳であり、三河において古墳時代前期後半の埴輪導入期に桜井古墳群の築造が継続していた証拠となる。

以上の桜井古墳群の特徴をまとめると、同時代に近畿地方の勢力の影響を示す前方後円墳と在地勢力の採用する前方後方墳が共存していること、弥生時代から続く伝統的な葺石を持たない墓造りが行われている点である。このことは、近畿地方とは異なる地域の独自性であると評価できる。一方、個々の古墳の墳丘形態や前方後円墳と前方後方墳がほぼ同時に出現することは、近畿地方に共通しているともいえる。また、今後の各古墳の調査の進展によっては、地方への埴輪導入時期や、その前後の社会動向を知る手がかりとなる可能性がある。

3世紀後半から4世紀代の碧海台地上は、大型の2基の古墳の周りに墳丘長40m級の前方後円墳・前方後方墳が密集していた地域であった可能性がある。このことから、桜井古墳群は古墳時代前期におけるムラの社会構造を解明する上で重要な古墳群といえる。さらに、急速な市街化にもかかわらず、その社会の全体像を示す手がかりとなる小規模な古墳が複数残されていることは、奇跡的な状況であるといえる。

最後に、弥生時代から古墳時代へ、ムラからクニへの社会構造が変化する時期に、当地域に矢作川流域における最古級の古墳が存在することは、桜井古墳群が「三河国」の始まりを示すと考える。

桜井古墳群の特徴をまとめると、以下のとおりとなる。

- ①古墳時代前期を中心とする古墳群
- ②前方後円墳と前方後方墳が共存する古墳群

- ③古墳時代の社会構造や階層性に迫れる古墳群
- ④古墳築造に葺石を伴わない古墳群
- ⑤「三河国」の始まりともいえる古墳群

(2) 鹿乗川流域遺跡群について

二子古墳西方の碧海台地上には、弥生時代後期の環濠集落が確認された本神遺跡が存在する。本神遺跡は碧海台地東側縁辺部に立地する環濠集落で、二子古墳を臨む場所に位置する。環濠からは在地の土器に加えて叩き甕など外来系土器が出土している。遺物は弥生時代終末期であり、古墳時代以前であるものの、鹿乗川流域遺跡群を評価する上では欠くことのできない遺跡である。

鹿乗川右岸に位置する沖積低地の微高地上には、北の坂戸・三本木遺跡から南の亀塚遺跡にかけて鹿乗川流域遺跡群が展開しており、桜井古墳群周辺は、弥生時代から古墳時代における矢作川流域屈指の拠点的な集落遺跡として知られている。近年の調査では、鹿乗川沿いの亀塚遺跡より下流の下懸遺跡や惣作遺跡等が確認され、より広範囲に弥生時代以降の集落が広がっていたことが確認されつつある。これらの集落を母体として、古墳時代に台地縁辺に桜井古墳群が造営されたと考えられている。このように、墓域と、その造営母体の居住域・生産域がまとまって存在し、集落から古墳を仰ぎ見る関係にある遺跡群は、全国的に見ても少数しか確認されていない。

これらの遺跡からは、人面文土器を始めとした線刻土器が見つかる事が特徴的である。また、外来系土器が多数確認されており、各地との活発な交流が存在していたことがわかる。

桜井古墳群内の首長系譜のあり方や、鹿乗川流域遺跡群を構成する遺跡個々の動態と古墳の関わりは、まだ十分な学術的知見が得られておらず、今後の解明が課題となる。

鹿乗川流域遺跡群の特徴としては、以下のとおりである。

- ①弥生時代から古墳時代まで継続する
- ②非常に広い範囲で展開する
- ③人面文土器を始めとする線刻土器がみられる
- ④外来系土器が多い
- ⑤古墳に隣接して居住域・生産域があり、古墳を仰ぎ見る位置関係にある



図5 西三河における古墳時代前期・中期の主要古墳位置図
 (「史跡 姫小川古墳」2011 安城市教育委員会 P96 より転載)



図6 鹿乗川流域遺跡群の周辺領域 (「史跡 姫小川古墳」2011 安城市教育委員会 P95 より転載)

